



2025.02

漢方医学センター
班目 有加

とある二組の親子の話 ～癩の強い子と抑肝散～

一組目は「怖い夢を見るので寝るのが怖い」という小学校低学年の男の子。幼少期から神経が過敏で、なかなか寝てくれない子。夜泣きも多く、ときに叫んで収拾がつかないことがあったと。音にも過敏、不快にも過敏、洋服のタグに執着し、お気に入りのタオルケットがなかなか手放せない子供だったとのことでした。よく聞くと、学校の学年が上がって緊張していた。母親もそれを心配してカリカリしていました。この親子には「抑肝散」を処方しました。子供はこれを飲むと怖い夢を見なくてすむ、と自ら飲むようになりました。よく眠れるようになり、日常の不安や緊張も少し和らいだよう。また、母親も同じく飲むことでリラックスをして、子供の不安を受容し、安心感を持たせる対応ができるようになりました。それがまた子の緊張を緩めました。

二組目は「身体が痛くて学校に行けない。」という中学生の男の子。どこを調べても痛みの原因となるような異常は無かった。ということで、漢方薬を試してみようという親子でした。やはり子供さんは繊細で、少しだけこだわりが強く神経質。幼少期から癩の強い子で、夜泣きも多く、「なかなか寝てくれない子」だったと。良い子で頑張り屋さんではあるが、大きくなった今も敏感に周りの空気を感じ取る。そんな子を想う母親は心配と不安で、こちらも過敏な状態となっていました。この親子にも「抑肝散」を処方しました。少しずつ不安と緊張がほぐれてきたのか眠れる時間が増え、痛みが和らぎ、学校にも少しずつ行けるようになりました。

一般的に癩の強い子、というイメージがわくかも知れませんが。繊細で神経が過敏で、いったん泣き出すとキーキーと泣き続けて収まらない、ずっと寝るのも大変でわずかな音で目覚めてしまう。睡眠不足で眠いのに上手に眠れないので母親も眠れずイライラ、この子は大丈夫か？と心配し不安。それが子供にも伝播してより一層泣く子供、といった負のループ。そんなときに抑肝散という漢方があります。

抑肝散の原典は薛己の『保嬰金鏡録』（1550年）や、薛鎧・薛己の『保嬰撮要（ほえいさつよう）』（1556年）と、500年前から使われている漢方薬で、もともとは小児の夜泣きの薬です。

「肝経の虚熱、搐を発し、或は痰熱咬牙、或は驚悸寒熱、或は、木土に乗じて嘔吐痰喘、腹脹食少なく、唾臥不安なるものを治す」という条文が出典で、「神経が高ぶり、怒りやすい、イライラがある人」の、交感神経の過緊張状態によって引き起こされる様々な症状に対応できるお薬です。

裏面に続く

また、条文の続きで「保嬰の法、未だ病まざれば乳母を調治し、すでに病まば、嬰兒を審らかに治し、また必ず、その母を兼治するを善しとす。」と記載があります。乳児を安らかに育てるには、まだ病気になっていないときは、乳母(あるいは母親)を治療し、すでに病気になったときには乳児を詳しく治療し、また必ず、その母親を治すことを忘れてはいけません。という意味です。

お母さんも一緒に不調を治してあげることが必要で、一緒に服用(漢方ではこのような使い方を子母同服と呼んでいます)する代表処方として抑肝散が位置づけられています。母と子が一緒に飲むことで、子供は不安が和らぎ、夜泣きや怖い夢が収まり、よく眠れるようになります。また母親も緊張度が下がり、子供に安心感のある接し方をできるようになり、それを見た子供また一層安心する。双方の不安が共鳴して発生していた緊張感が和らぐのです。昔は育児を母親がメインで行っていたからこのような記載となっていますが、現代では子父同服の必要性も出てきているかもしれませんね。

そんな抑肝散、幅広く使用できることは先にお話ししましたが、適応としては、神経症、不眠症、小児夜泣き、小児疳症(神経過敏)、更年期障害、血の道症、歯ぎしりです。

現在は認知症の周辺症状(イライラ、不眠など)に有効性が認められ有名になってきました。応用としてチックや斜頸、眼瞼痙攣や手指の震えなどの不随意運動や、むずむず脚症候群などにも使用します。

小児から更年期、認知症の様々な症状に同じ漢方薬を使用できるのが面白いところです。

ストレスを耐え忍んで生活している人は現代社会においてとても多く、子育て世代だけでなく、社会で働き始めの人、屋台骨となっている人、さらに更年期がかぶり、親の介護に孫の世話に伴侶の退職と病気に悩む人達はたくさんの方のストレスを抱えます。

そこで出てくる身体の不調もさまざま、ひどい月経痛や腹痛、更年期のホットフラッシュ、不眠やいらいらだけでなく、頭痛、肩こり、不安から来る性交障害、陰部痛、手術後の創部痛、一見とりとめも無い多くの病気に背景も考慮した上で抑肝散を使用して、よく効くことがあります。幅広く受け皿のあるお薬です。抑肝散は高齢者の長期投与でまれに血圧上昇などの副作用を来すことがあります(偽アルドステロン症といいます)、基本的には安全度の高い漢方薬です。

もちろん問診をすすめて、違ったお薬が選択されることは多くありますが、こんな症状でも受診していいんだなと一つのきっかけとなれば幸いです。

漢方外来は**紹介制・予約制**です。当院におかかりの方は、各診療科の主治医に漢方外来への受診希望をお伝えください。